

史跡出雲玉作跡

一宮ノ上地区

—第2次発掘調査概報—

1985

玉湯町教育委員会

はじめに

昨年度の第1次調査に引き続いて、本年度、第2次調査を実施しました。これをもちまして、宮ノ上地区に関する調査をすべて終了いたしました。

58年度はF地区を中心に調査を行い、第1地点では、多量の古式土師器と玉類未成品を検出しました。59年度はA地区を除くその他の地域について調査を進みました。その結果、E地区社務所西側ではF地区第1地点と一連のものと考えられる古墳時代前期の土器群を検出しました。またC地区収蔵庫周辺から古墳時代後期に属する玉類未成品が多数出土し、宮ノ上地区でも前期から後期にわたって長期間玉作りが行なわれたことが判明しました。

両次の調査で、指定地および周辺の遺物包含層やその内容がある程度把握され、目的を果たすことができたと思います。今後はこの成果をもとに、保存管理計画を策定し、遺跡の保護と活用に万全を期して参りたいと存じます。

2カ年にわたる発掘調査にあたり、格別のご指導を賜りました文化庁、島根県教育委員会、調査指導の先生方、さらにご協力をいただいた地元の地権者の方々に心からお礼申し上げます。

昭和60年3月

島根県八束郡玉湯町教育委員会

教育長 仲 義 弘

例　　言

1. 本書は、玉湯町教育委員会が昭和 59 年度に国庫および県費の補助を得て実施した史跡出雲玉作跡（宮ノ上地区）の第 2 次発掘調査の概要である。
2. 調査は昭和 59 年 5 月 15 日から 9 月 28 日まで断続的に実施した。
3. 調査体制は次のとおりである。

調査指導　　文化庁　　仲野浩（記念物課主任文化財調査官）
島根県教育委員会　永塚太郎（文化課埋蔵文化財第一係長）、西尾
克己（同主事）、卜部吉博（同主事）、鳥谷芳
雄（同主事）
調査指導委員会　　山本清（島根大学名誉教授）、寺村光晴（和洋
女子大学教授）、渡辺貞幸（島根大学助教授）
前島己基（奈良国立博物館主任研究官）
調査員　　勝部衛（玉湯町教育委員会主任主事）
調査補助員　青砥みつる、服部友枝、森山和子、渡辺キヨコ
調査事務局　仲義弘（玉湯町教育委員会教育長）、吉野暢一（同教育次長）、森
脇幸好（同主任主事）、小西賢治（同社教主事）

4. 調査にあたり、地権者の玉作湯神社（遠藤融宮司）、小村栄一氏に多大なご理
解とご協力を得た。
5. 本書の作成は勝部衛が行った。図版作成には玉湯町立出雲玉作資料館の足立幸
子氏の協力を得た。
6. 史跡出雲玉作跡（宮ノ上地区）第 1 次および第 2 次調査による出土資料は一括
玉湯町立出雲玉作資料館で保管している。

目 次

はじめに

例 言

I	調査に至るまでの経過	1
II	位置と歴史的環境	2
III	第1次調査の概況	4
IV	第2次調査の概要	6
1.	調査の経過	6
2.	各地区の調査の概要	7
(1)	B 地区	7
(2)	C 地区	9
(3)	D 地区	13
(4)	E 地区	14
(5)	G 地区	21
V	まとめ	22

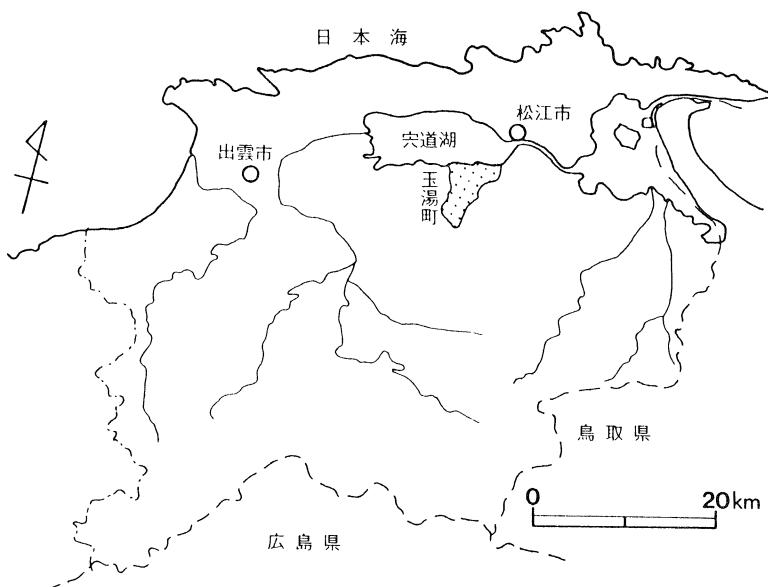


図 1 玉湯町の位置



I 調査に至るまでの経過

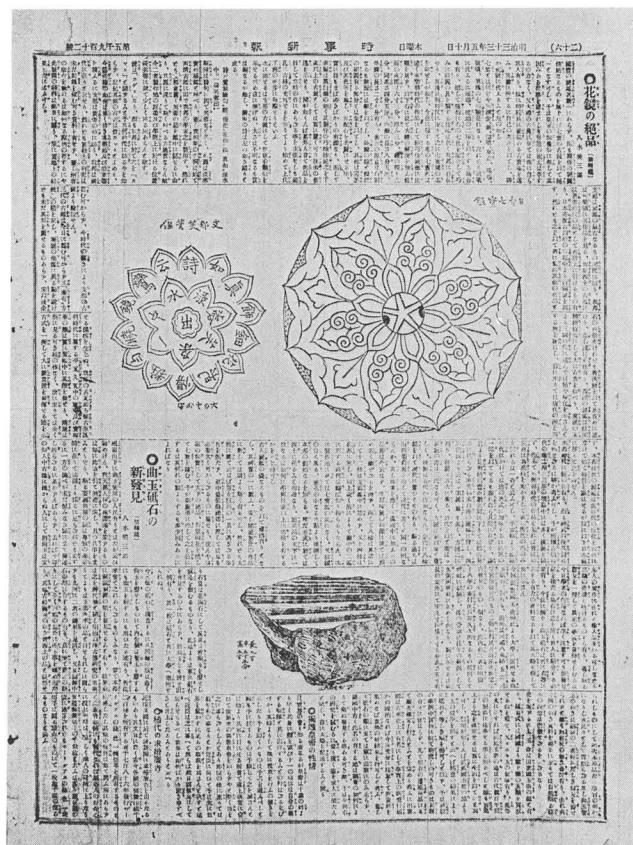
出雲における古代玉作り遺跡の存在は、奈良・平安時代の古文献から推定されではいたが、それを裏付ける考古資料の発見・収集は明治以降のことであった。中央学会への紹介は八木獎三郎による「曲玉砥石の新発見」（明治33年5月10日付け『時事新報』）（写1）が最初である。以後、多数の学者の注目するところとなり、報告・論文は10指に余る。昭和2年には、それまでの集大成ともいわれる『出雲上代玉作遺物の研究』が京都帝国大学文学部より刊行された。

一方、大正11年には、宮ノ上地区、宮垣地区、玉ノ宮地区の3箇所が「出雲玉作跡」として国の史跡に指定された。指定地も含めて、玉作り遺跡で採集された玉未成品や砥石はその都度玉作湯神社へ奉納され、今日まで700点余に達している。そのうち約400点は重要文化財に指定されている。

玉湯町内において、発掘調査が初めて実施されたのは、昭和44年と46年3次にわたって行われた史跡出雲玉作跡（宮垣地区）の調査であった。古代玉作りの工房跡を多数検出し、大きな成果を挙げた。出雲では松江市忌部中島・後原遺跡の昭和39年について2番目の調査であった。

宮垣地区は、その後昭和49年に史跡公園に整備された。

他の2箇所の指定地（宮ノ上地区・玉ノ宮地区）については、それまで調査が及んでいなかった。遺跡の範囲や性格が今一つ不明確なところから、今後の保存管理上の資料を得る目的で、58年度より年次的に発掘調査を実施することになった。1次調査ではF地区を中心に調査を行い、第1地点では多量の古式土師器や玉類未成品を検出し、2次調査の成果が注目されていた。



写1 最初の玉作りに関する報告（『時事新報』明治33年5月10日付）

II 位置と歴史的環境

位置 宍道湖南岸は低くなだらかな丘陵が湖岸までせまり、その山ひだを縫って多くの小河川が湖に注いでいる。玉湯川もそのうちの一つで、大谷から玉造と狭い谷あいを北流し、河口の湯町付近でわずかな沖積地を形成する。

調査の対象となった宮ノ上地区は玉材産出地花仙山周辺の玉作り遺跡群の一つで

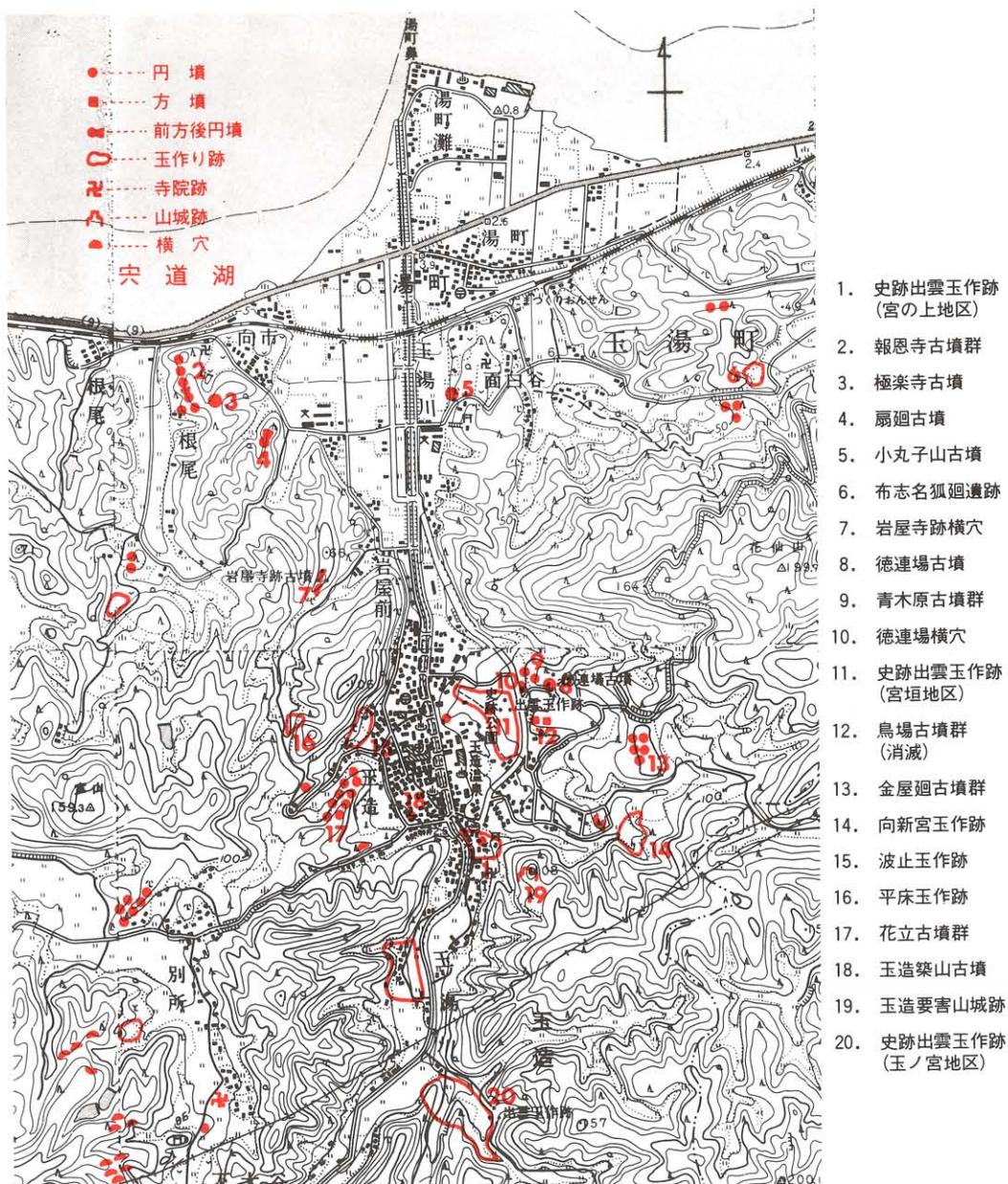


図2 出雲玉作跡（宮ノ上地区）の位置と付近の主要遺跡（1：25,000）

ある。玉湯川の河口から約2.5キロメートルさか上った谷あいの右岸に位置する。

遺跡は玉作湯神社の境内を中心とし、本殿裏山から、川沿いの低地まで、階段状の地形をなしている。裏山の標高は約50メートルを測る。上段には、本殿や拝殿、中段には収蔵庫、下段には宮司宅や社務所があり、川沿いの低地には民家が建ち並んでいる。指定地の総面積は、約8,780平方メートルである。

歴史的環境 玉湯川流域では弥生時代以前に属する遺跡は極めて少ない。数箇所から土器片が採集されているが、いずれも詳細は不明である。

古墳時代に入ると、玉作り遺跡を中心に多数の遺跡が展開する。隣接する松江市忌部地区とともに花仙山周辺玉作り遺跡群として把握されている。玉湯川流域には周辺も含め、11箇所に玉作り遺跡が確認されている。このうち前述した史跡出雲玉作跡（宮垣地区）の調査では、約30棟の玉作り工房跡や数万点にのぼる玉作り関係資料が検出され、古墳時代前期末葉から平安時代にかけて玉作りが行なわれたことが判明した。⁽¹⁾ また昭和54年に発見された布志名狐廻遺跡は、⁽²⁾ 6世紀後半代にめのう製勾玉を主に生産した玉作り遺跡であった。

こうした玉作り遺跡に対し、玉湯川流域には多数の古墳も分布し、総数約60基が知られている。これらは、中、下流域の玉造、湯町の両地区に集中する。

玉造地区では、2～8基を単位とする径10メートル前後の小円墳が、玉作り遺跡を取り囲むように分布する。古式の舟形石棺を内部主体とする徳連場古墳や玉造築山古墳⁽⁴⁾が中期的様相を示す他は、いずれも後期の古墳と考えられる。国指定史跡の岩屋寺跡横穴群など横穴も数箇所に存在する。⁽⁵⁾

一方、わずかな沖積地の広がる湯町地区には、玉作り遺跡が見当たらず、古墳の築造数も少ない。しかしその反面、規模の比較的大きな古墳が小平野を見下ろす丘陵縁辺部に独立して築かれることが多い。全長約50メートルの報恩寺第4号古墳⁽⁶⁾や扇廻古墳などの前方後円墳が知られている。

玉湯川流域の古墳の数や規模は、狭小な地域の農業生産力には不相応で、玉作りの実施と深くかかわりを持つものと考えざるを得ない。



写2 史跡出雲玉作跡（宮垣地区、史跡公園に整備）

III 第1次調査の概況（昭和58年度）

第1次調査は、F地区の2地点で実施した。昭和58年4月15日に着手し、9月15日に終了した。⁽⁷⁾

第1地点は地目は畠で、ほぼ平坦地、標高は22.3メートルを測る。基本層序は4層からなり、第3層下面で遺構が検出された。遺構には溝状遺構1、土壙3、ピット20がある。溝状遺構は延長約6メートルで、幅約40センチ、深さ約20センチを測る。4メートルほどで直角に折れ曲がり、両側に人頭大の石が1段並置されていた。伴出遺物から近世以降のものと考えられる。

第4層は調査区の北半分のみから検出され、a～eに区分できた。このうち4-c層は砂れき層で幅と方向性をもち、4-d層の一部をえぐって堆積している。

4-d層は調査区の北東側に厚く、5～40センチの厚さをもつ。黒褐色を呈し、やや粘質を帶びる。地山の直上ある。この層中から、玉作り遺物を含む多量の土器群がまとめて出土し、たいへん注目された。

大部分が古式土師器で総量が50固体を越え、



写3 F地区第1地点(東より)



写4 F地区第1地点4-d層遺物出土状況

壺、甕、器台、高杯、低脚杯、注口土器などを含む。完形に近いものもあり、形態のわかる土器がまとまって出土している。保存も良好で、文様や調整手法もよく看取される。壺、甕は複合口縁で口縁外面には文様はなく、肩部にクシまたはハケ状工具により、平行沈線、波状文が単独または組み合わせて施文される。口縁部内外はヨコナデ、体部外面はハケ目調整、内面頸部以下はヘラ削りを施す。

玉材は碧玉と水晶を主体とし、若干の石英と黒曜石片を含む。めのうが全く検出されず、注目された。明瞭な未成品として、碧玉製勾玉、同管玉、水晶製品がある。その他小型磨製石斧。石包丁様石器、石鎌が各1点見つかっている。

第2地点は玉湯川と道路をはさんで接している。畑で、砂層とれき層が互層をなしていた。流水に洗われた形跡があり、遺構はなく、陶磁器片がわずかに検出されている。

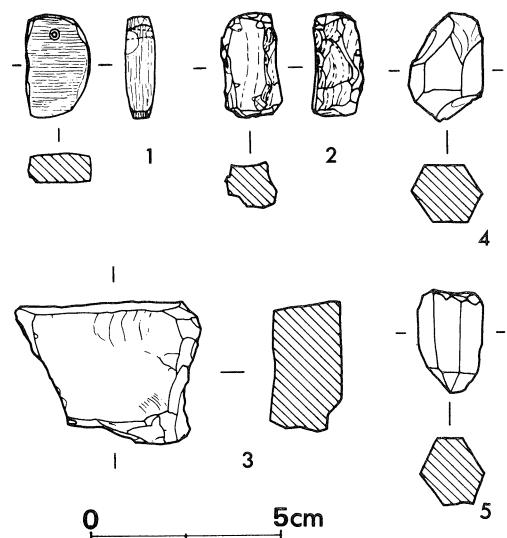


図3 F地区第1地点4-d層出土玉類実測図

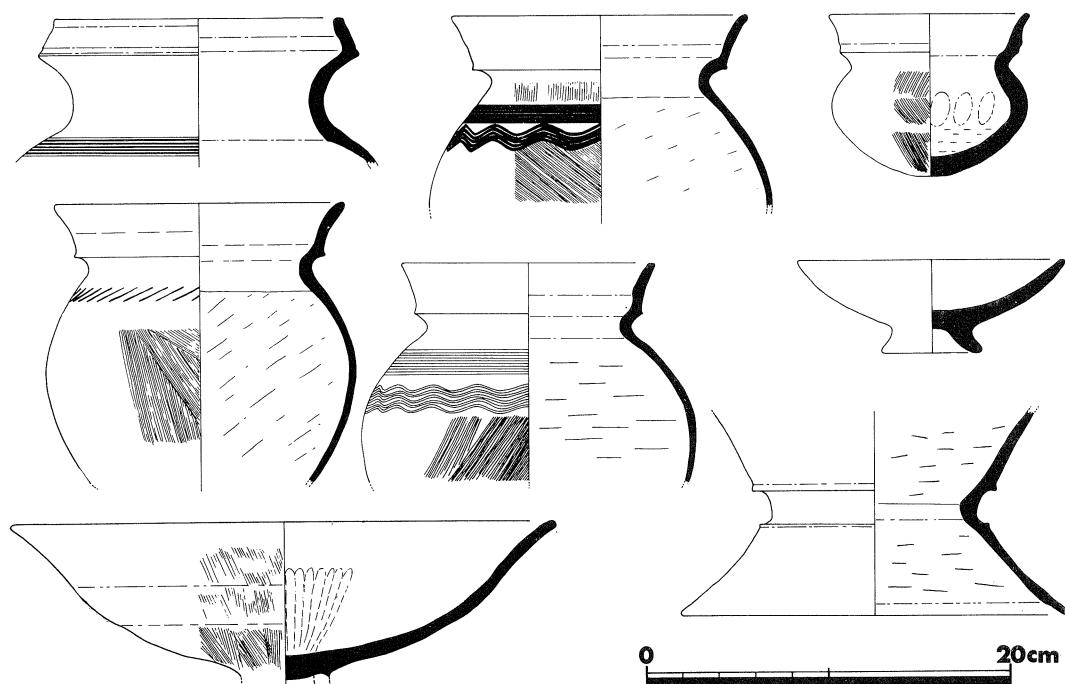


図4 F地区第1地点4-d層出土土師器実測図

IV 第2次調査の概要

1. 調査の経過

地区割りは、昨年の1次調査の際と同様である。地形によりA～Gの7地区に分け、さらに、全域を、NラインとEラインにより、2メートル方眼のメッシュでカバーした。

本年度の調査は、B、C、D、Eの5地区で実施した。昭和59年5月15日に着手し、同年9月28日すべてを終了するまで、約4箇月余、実働日数66日を要した。C地区から開始し、それぞれ重複はあったが、ほぼB、D、E、G地区の順で行った。各調査区はそれぞれの地区名を頭に付けて、CT1区、ET5区などとした。

C地区は、収蔵庫北側の古墳の測量から始めた。トレンチ（グリッド）は、遺物の散布が認められた収蔵庫東側に設置し、同南側から西側へと設置箇所を広げた。古墳の周囲にもトレンチを設け、墳丘の形態・規模の追及を試みた。収蔵庫東側では予想していたように、須恵器を伴う玉類未成品が多量に出土した。

6月に入ると、B地区の調査にかかった。裏山を削り、造成した地区と考えられたが、調査の結果もこれを裏付けるものであった。旧表土から、若干の陶磁器類を検出した。

D地区は7月から手を着けた。宮司宅の周辺で、建物等の制約から3本のトレンチにとどまった。土師質皿等を検出したが、湧水のため完掘できなかった。

E地区は、昨年度すでに社務所北側と南側で調査を終了していた。西側では土器群の存在を確認しながら、中途で調査を打ち切っていた。今年度は、それを完掘し、若干の遺構と古式土師器群、多量の玉類未成品を検出した。昨年度調査をしたF地区第1地点に隣接し、4-d層との関連が注意された。E地区は7月半ばに調査を開始し、9月末に終了した。

この間約1週間G地区の調査を並行して実施した。



写5 調査スナップ(1)



写6 調査スナップ(2)

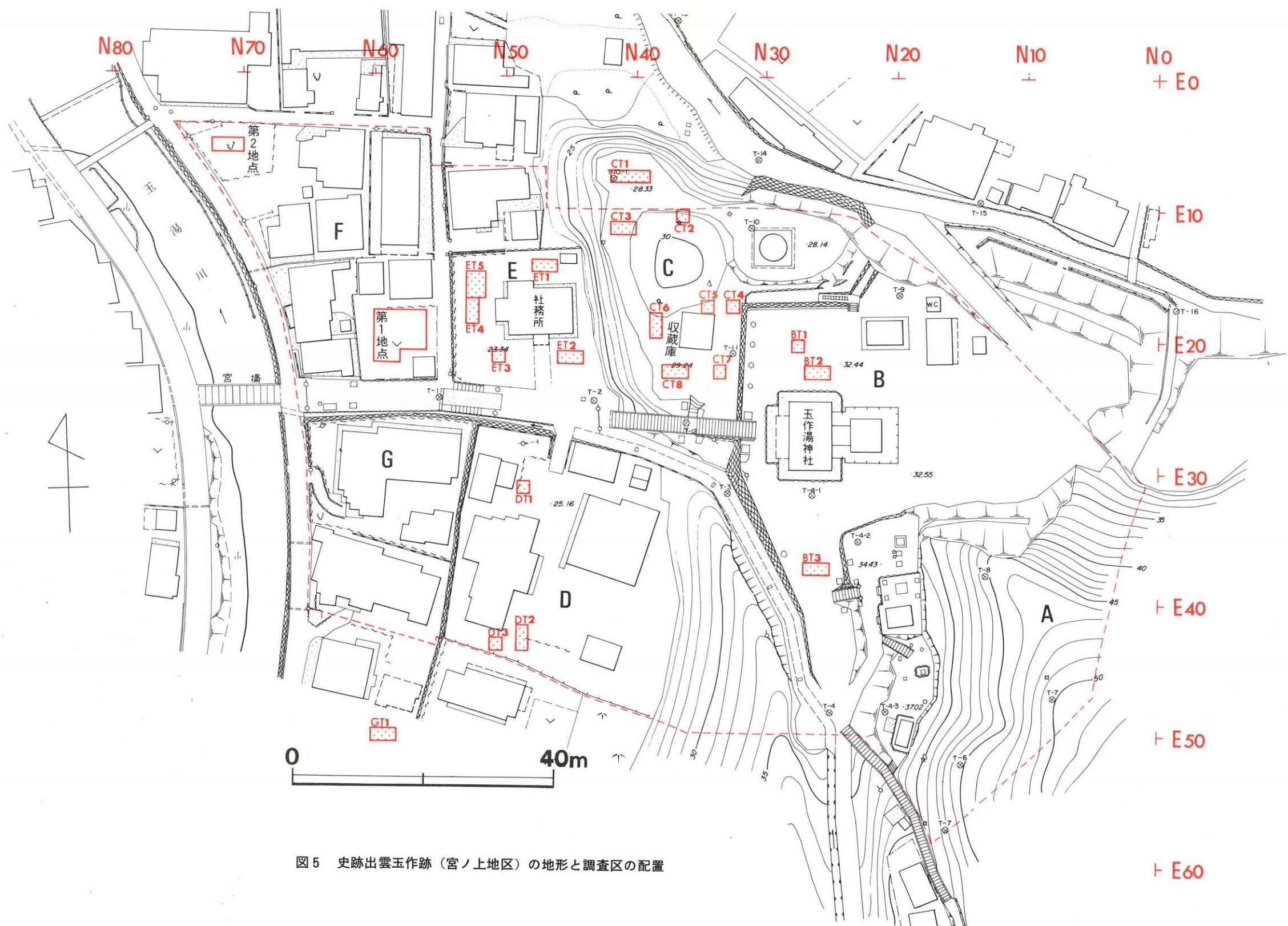


図5 史跡出雲玉作跡（宮ノ上地区）の地形と調査区の配置

2. 各地区的調査概要

(1) B 地区

約 2,000 平方メートルの平坦地で、神社本殿および拝殿など数棟が建ち並ぶ。標高は 32.5 メートル前後である。南東部は 2 段に整形されている。本殿の南側は高さ 10 メートル余の砂岩の崖で、北に延びる尾根の先端部が削平されている。B 地区の北側と西側は高さ 3 メートルほどの石垣が築かれている。

トレンチ（グリッド）は 3 箇所に設けた。B 地区の北側に 2 箇所（BT 1 区、BT 2 区）、南側に 1 箇所（BT 3 区）である。いずれも岩盤まで掘り下げた。

BT 1 区では、2.2 ~ 2.4 メートルで岩盤に達した（図 6）。北西に傾斜する。遺構はない。1 層は整美用の白砂、2 ~ 5 層は岩盤の破碎された明黄色の砂層。6 ~ 10 層は不整に堆積する暗い色調の粘質土である。ただし 8 層は 2 ~ 5 層と同じ黄色の砂層である。11 層は岩盤の傾斜とほぼ平行し、暗褐色土で、若干の陶磁器を含む。

5 層までは岩盤を削平した土砂を埋め立てたものであることは明白である。6 ~ 10 層も同様な砂層を間に挟むことや乱雑な層序から、他の地点の土砂を削り取り、埋め土として使ったと考えられ、11 層が旧表土と推定された。

BT 2 区は BT 1 区の南東に隣接する。約 0.5 ~ 1.4 メートルの深さで岩盤に達



写 7 B 地区近景

した(図7)。西側に傾斜する。4層までは明黄色の砂層を中心に互いに平行した層序を示す。茶褐色の5層も砂層をブロック状に含み、ここまでは盛り土とわかる。岩盤の傾斜に近い6層が旧表土と考えられ、BT1区での11層に当たる。

本地区の南端に近いBT3区でも、0.7~1.5メートルで西に傾斜する岩盤に達した。今回調査したB地区の各地点は、いずれも西から西北に傾斜する旧地形の上に盛り土を施していた。旧表土からわずかな陶磁器片が出土した他は、遺構など皆無であった。



写8 B地区T2区全景（西より）

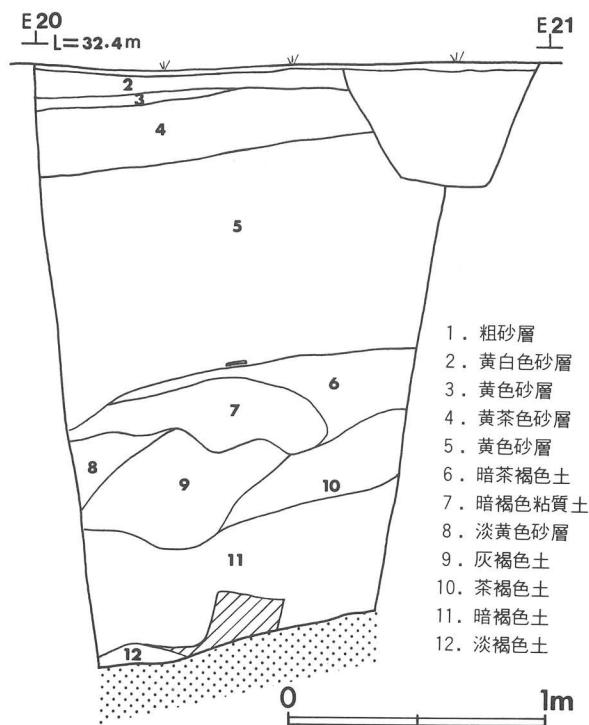


図6 B地区T1区東壁（N27ライン）実測図

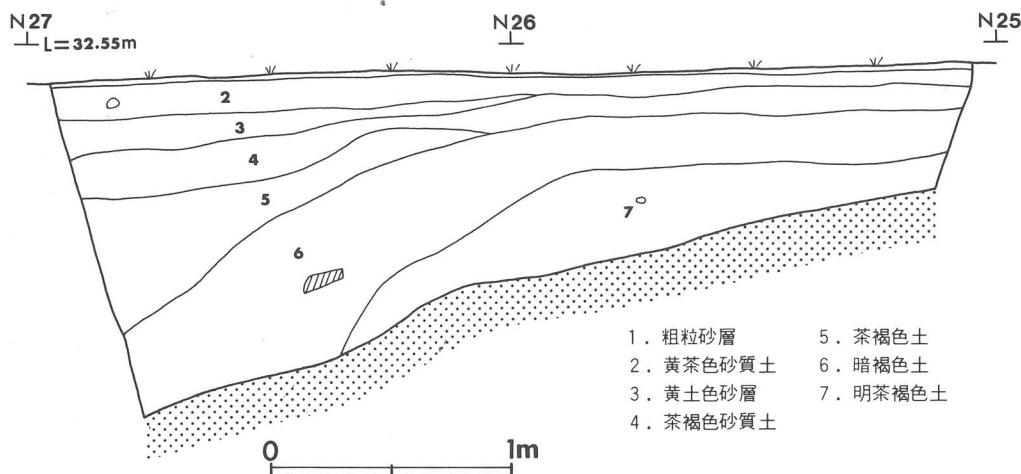


図7 B地区T2区北壁（E22ライン）実測図

(2) C 地区

C 地区は、北西に半島状に突き出した標高 28 ~ 29 メートルの平坦地である。B 地区より 4 メートル前後低い。中央部に玉作湯神社境内古墳があり、南に接して出雲玉作跡出土品収蔵庫が建てられている。古墳の東側には相撲場が設置されている。

この地区も、今まで地形の改変を受けているようである。玉作湯神社の宮司さんによると、収蔵庫から南側は、昭和 2、3 年頃、環境整備のため 20 ~ 30 センチ削平したということである。また土俵のある場所は、もともと浅い谷で、昭和 30 年代に埋め立て造成したといわれる。

C 地区では、これまで砥石や玉類未成品、土器片が採集されている。現在も収蔵庫の東側には碧玉、水晶、頁岩の剥片や土器片が散布している。

C 地区には 8 箇所にトレーナー（グリッド）を設置した。収蔵庫および古墳の周辺を中心とし、北端部の指定地外にも設けた（CT 1 区）。C 地区では砂岩の岩盤が表土から深くないところにあり、ほとんどのトレーナーで岩盤まで掘り下げた。北端部の CT 1 区付近では一部表面に露出しているほどである。岩盤の傾斜は概して緩やかで、古墳の北側と西側、収蔵庫の西側では西に、同じく収蔵庫の南側では東に傾斜している。収蔵庫の東側の CT 4 区では、岩盤に達する前に黄茶色粘質土の地山にあたった。深さは表面から約 1.2 メートルで、岩盤はさらに下がるものと思わ



写9 C地区収蔵庫付近近景（南東より）

れる。

玉作湯神社境内古墳 測量した結果（図8）、現状では長径16.4メートル、短径15.2メートル、高さ2.2～2.7メートルを測る。墳頂には「玉祖神陵」の石碑がある。古墳北西側のコブ状の隆起は、中心に腐食した大木の株が残っているためである。センターは西側および南側で直線的で、北側も株を差し引いて考えると直線的になる可能性がある。

墳丘の周辺に設けた4つのトレンチの調査では、墳丘の形態、規模を明確にすることは残念ながらできなかった。

遺構 炉状遺構と地山（岩盤）で検出したピット群がある。炉状遺構は収蔵庫南に設けたCT8区で検出したもので、現地表面からわずか20センチ掘り下げたところにあった。浅い椀状を呈し、全体の約1/3が残存していた。現存の大きさは35×35センチである。火を長時間受けた痕跡は明らかで、表面には炭化物が付着し、順に黒灰色、赤茶色、黄茶色と変色している。この部分は堅く締まっており、厚さは約8センチほどである。

ピットは図示できなかったが、CT1区、CT4区、CT6区、



写10 玉作湯神社境内古墳近景（北西より）

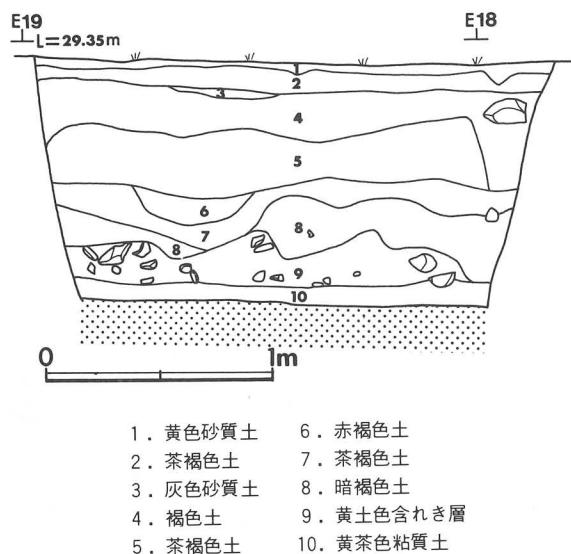


図9 C地区T4区西壁実測図



写11 C地区T1区全景（南より）

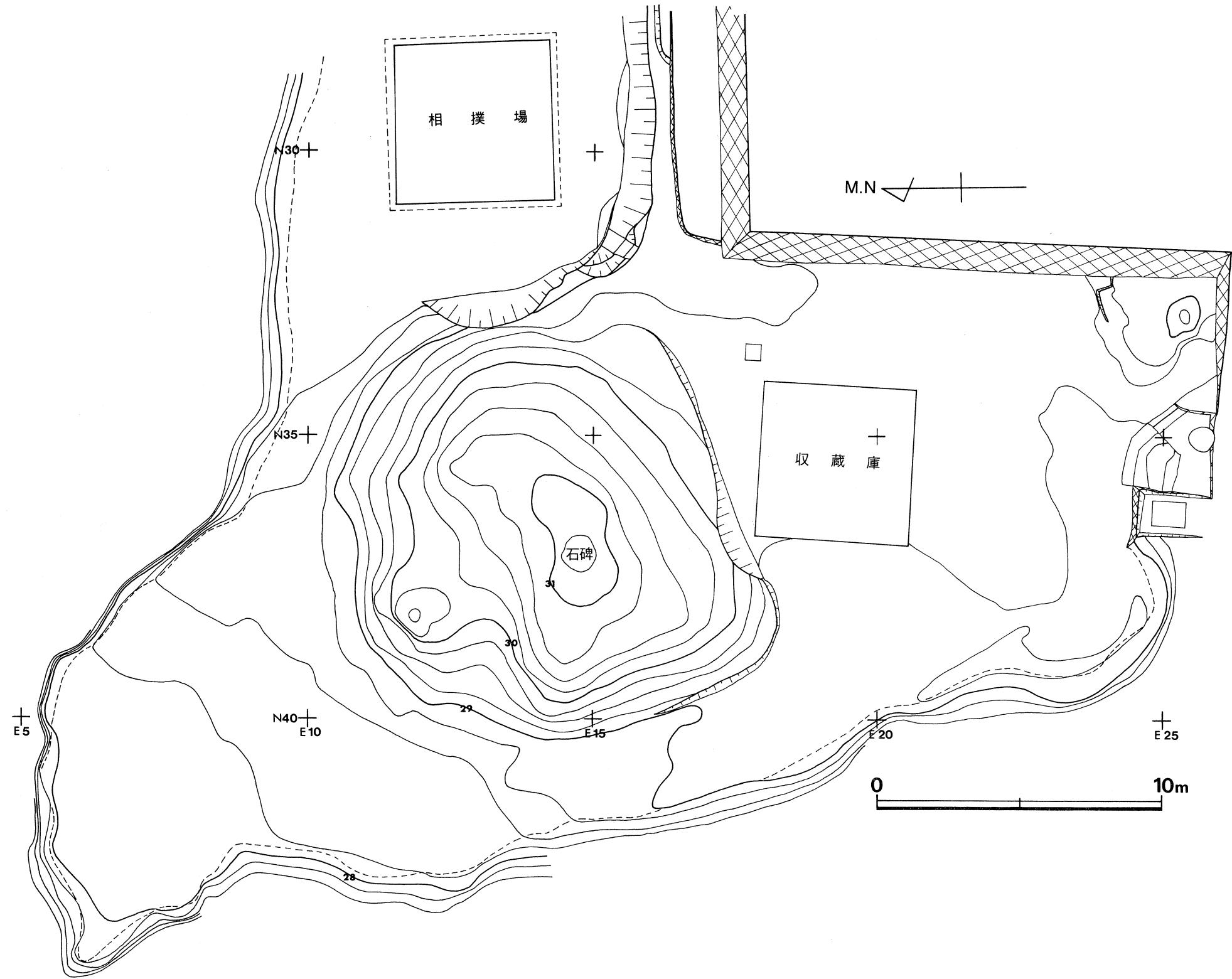


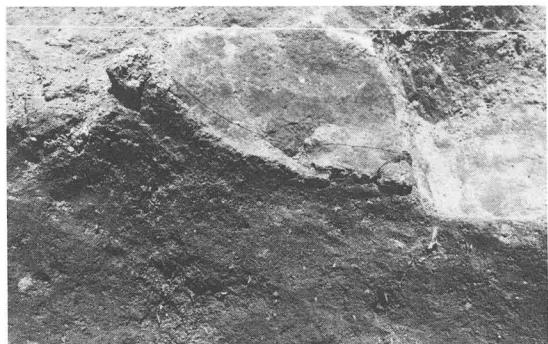
図8 玉作湯神社境内古墳測量図

CT 8 区の地山や岩盤から見つかっている。特に CT 8 区では多かった。しかし調査区が狭いため互いの関連は不祥である。

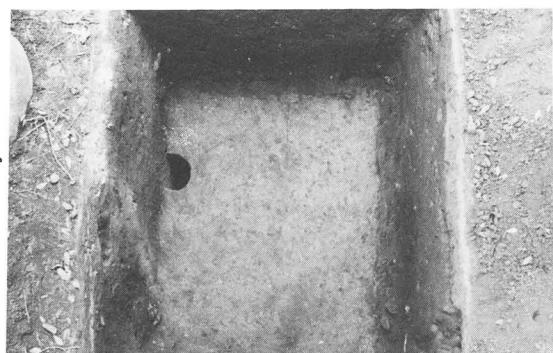
遺物 遺物は各層に包含された状態で出土した。収蔵庫の東側と南側で、ほとんどの遺物が出土している。特に CT 4 区では多かった。

CT 4 区ではすでに表面に遺物の散布が認められ、調査の性格上、最小単位である 2×2 メートルのグリッドを設けた。地山まで深さ約 1.2 メートル、その間 10 層の層序が確認された。CT 4 区から出土した遺物の総数は 300 点を越え、このうち第 4 層出土資料が $2/3$ を占める。

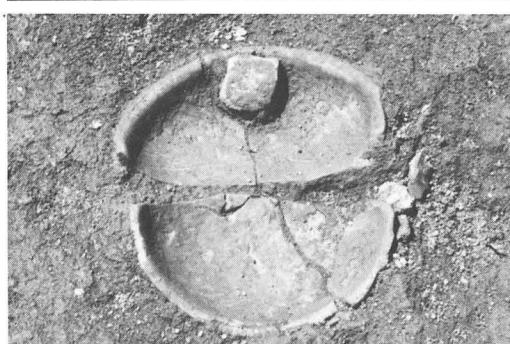
CT 4 区 4 層出土資料は土器、玉類、



写12 C地区T8区炉状遺構断面



写13 C地区T4区全景(北より)



写14 C地区T4区第4層遺物出土状況(左上:水晶切子玉未成品、左下:土師器碗形土器、右上:滑石臼玉未成品、右下:内磨砥石と土師器)

砥石に分けられる。

土器には須恵器と土師器がある。玉類に比べ量的にはたいへん少ない。土師器椀形土器（図10-1）は直径13.8センチ、高さ4.7センチを測る。ほぼ完形品である。赤褐色を呈し、胎土はきめ細かく、砂粒も少ない。口縁端部が外側へ反転している点に特徴がある。須恵器は杯の身で（同2）、やや小型である。直径12.6センチ、高さ4.4センチを測る。灰白色を呈し、焼成良好である。受け部の立ち上がりは内傾し、端部は丸みをもつ。底部はヘラ削りが施されている。

玉材は碧玉と頁岩が多く、水晶、めのうは少ない。未成品には頁岩製の臼玉、碧玉製の管玉・勾玉、水晶製の切子玉、めのう製の勾玉などがある。量的には臼玉未成品が最も多い。図11-1、2はめのうの勾玉未成品である。1は両側面に自然面が残り、板状の石を加工したことがわかる。長さ3.2センチである。2は下半部を欠いている。湾曲部内側のみに研磨痕が認められる。図示した面とは反対の面からの穿孔を終えている。現存長は1.9センチである。

3は碧玉製管玉未成品で、側面打裂工程にある。ほぼ4角柱で、長さは2.4センチである。4は水晶製切子玉の未成品で全面



写15 C地区T4区第4層出土土器

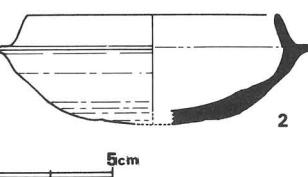
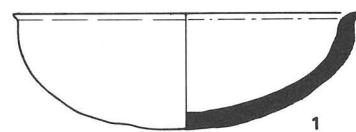
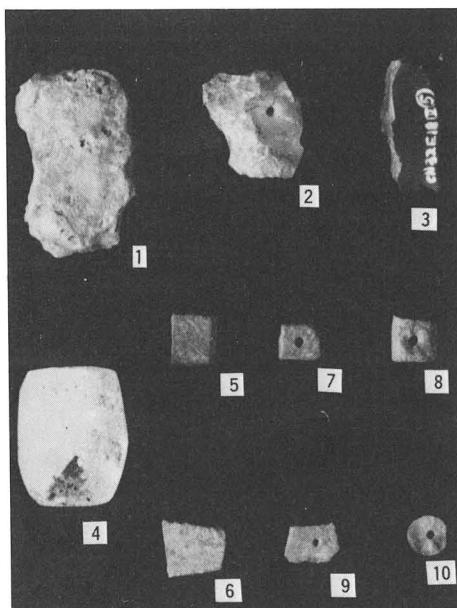


図10 C地区T4区4層出土土器実測図



写16 C地区T4区第4層出土玉類
(番号は図11に同じ)

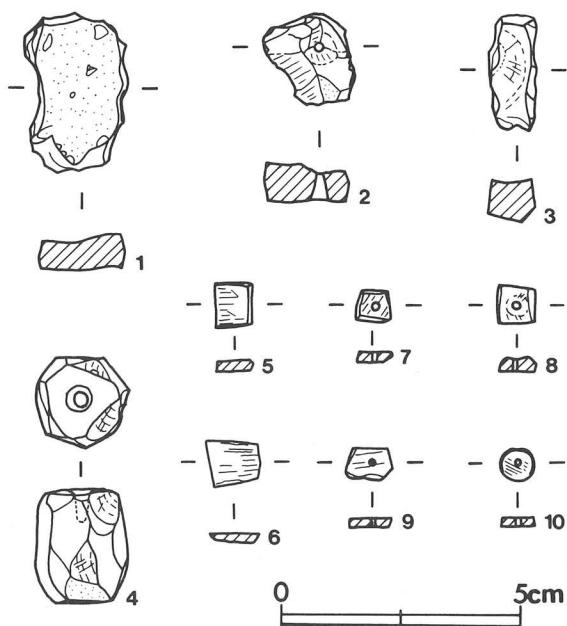


図11 C地区T4区第4層玉類実測図

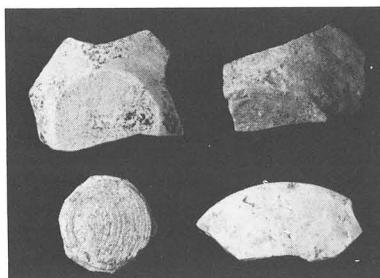
に荒い研磨が及び、穿孔途上のものである。固有の結晶面をうまく利用している。長さは2.4センチである。5～10はいずれも頁岩製の臼玉未成品である。表裏に荒い研磨痕が残る。10はほぼ完成品で、直径10ミリ、厚さ1.2ミリを測る。

砥石はいずれも内磨き砥石で結晶片岩製である。未使用も含めて、5個検出されている。写14の右下は、長さ11.4センチほどで、紅れん石を含んでいる。

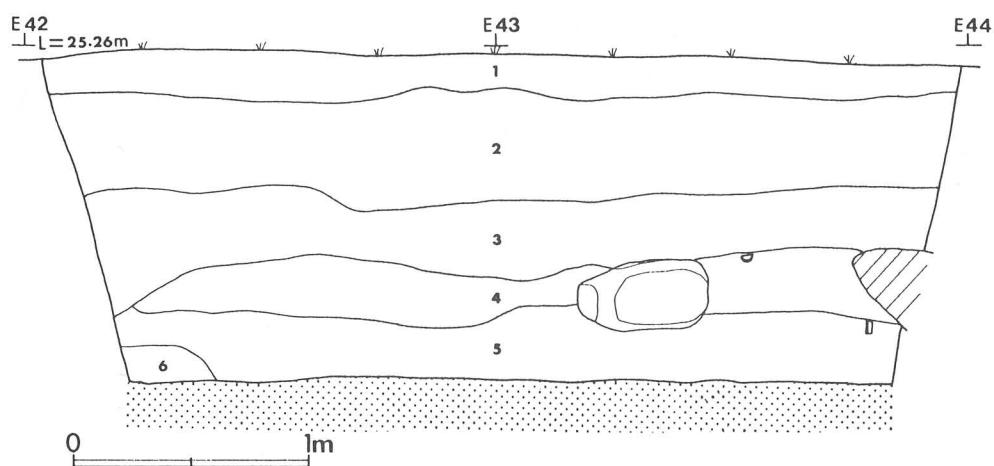
(3) D地区

山裾の平坦地で、標高は25メートル前後を測る。面積は約1,200平方メートルである。北側と西側に石垣があり、特に西側は2.5メートルと高い。東側はB地区からの山裾に接している。宮司宅の敷地で、母屋をはじめ数棟の建物が並んでいる。庭もあり、調査できる所は限定された。

トレント（グリッド）は南側の畠に2箇所、北側の車庫前に1箇所設けた。南側のDT2区とDT3区は互いに近接している。いずれも地表下約1.4メートルで湧水があり、写17 D地区T2区出土土師質皿



写18 D地区T2区全景



1. 暗褐色土 3. 暗灰色土 5. 灰褐色粘質土
2. 茶褐色砂質土 4. 褐色土 6. 暗灰色粘土層

図12 D地区T2区東壁(N48ライン) 実測図

それ以下の調査を打ち切った。

D T 3 区では 2×4 メートルのトレンチの南端で人為的と考えられる石群が検出された（写18）。偏平な大型の石の両側に小型の石が置かれている。この石組みの周囲から土師質皿をはじめ、陶器類が出土している。古代玉作りに関する資料はなかった。

(4) E 地区

E 地区は、C 地区に連なる急傾斜の崖下で、標高 23.5 メートル前後の平坦地である。面積は約 500 平方メートルほどである。北と西側に高さ 1 メートルほどの石垣が築かれている。この地区は社務所が昭和 2 年に建築される前は、畠であったという。さらにさかのぼると民家が建っていた時代もあったようである。石垣は社務所が建築されるのと同じ頃に築かれたということで、それまでは東側の山裾から、西に緩やかに傾斜していたと伝えられる。

社務所の周囲に 5 つのトレンチ（グリッド）を設置した。ここは昨年度からの継続調査で、E T 1 区～E T 3 区は 58 年



写19 E地区T3区北壁 (E21ライン)



写20 E地区社務所西側 (南より)

度に調査を終了し、ET 4 区と ET 5 区は兩年度にわたった。報告は昨年度分もあわせ本概報で行う。

ET 1 区は社務所の北側、ET 2 区は南東側に設置したトレーンチである。いずれも 1 ~ 1.2 メートルで地山に達し、わずかの陶磁器片を検出したにとどまった。

ET 3 区は社務所の南西に位置する。0.9 ~ 1.1 メートルで地山に達した。約 60 センチ以下は拳大から人頭大の円れきを多数含み、その間に砂層、粘土層が形成されていた。流水のあったことをうかがわせる。

① ET 4 区

ET 4 区は社務所の西側で ET 5 区の南に接している。トレーンチは 4 × 2 メートルである。1 層から 14 層までは明らかに埋め土で、瓦片、コンクリート片などいわゆる瓦礫も一部に含まれていた。トレーンチの東側には排水用の塩ビパイプが走っている。15 層と 16 層が最初に盛り土されるまでのオリジナルな層であったと推定される。

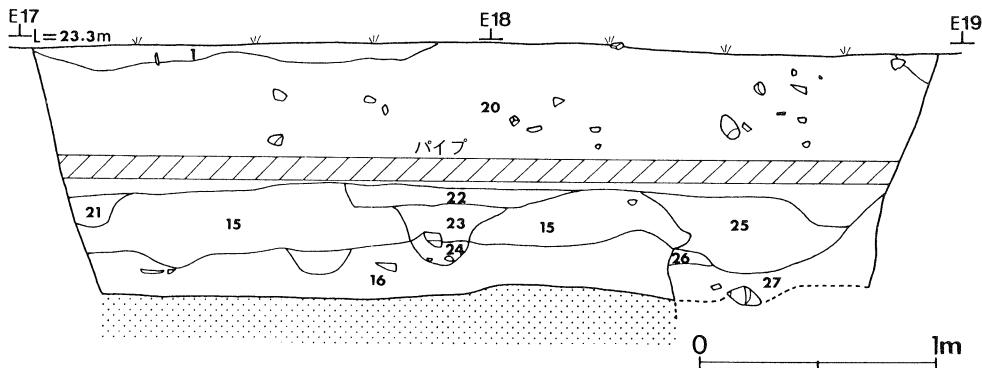


図13 E 地区 T 4 区東壁 (N52ライン)

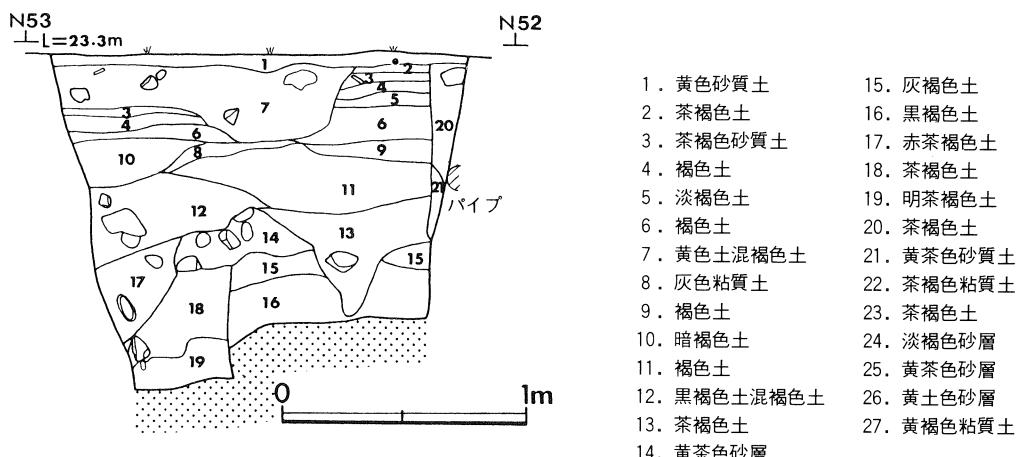


図14 E 地区 T 4 区北壁 (E17ライン) 実測図

E T 4 区では調査区をほぼ南北に横切る段が検出されたことが注目される（写21）。15、16層が地山とともにカットされ、南端の幅 80 センチほどは石垣が築かれている。石垣の背後では15、16層が切れており、注意される。段の上面は地表から 1 メートルほど下で、標高 22.3 メートル前後である。現在の石垣とほぼ平行しており、約 2 メートル 東へ入っている。段の高さは、北側で 50 センチ、南側の石垣で約 90 センチで、南側に行くほど高さを増している。石垣は人頭大から一抱えもあるれき岩を使用するが、方柱状に加工された凝灰質砂岩（来待石）も 1 個含まれている。

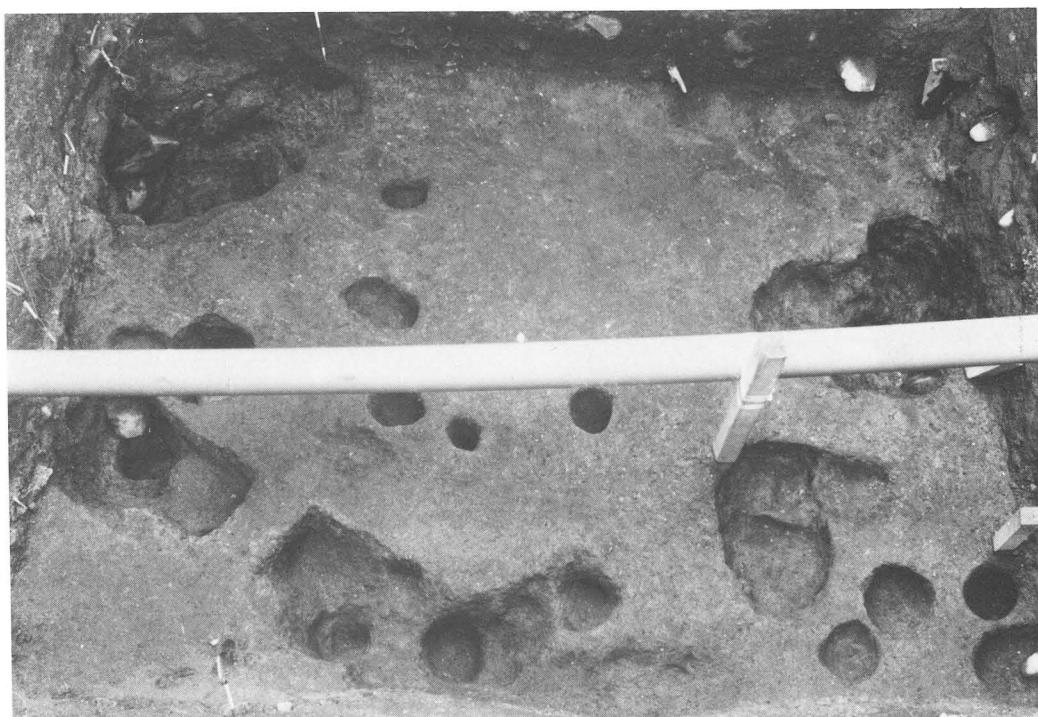
遺物では 16 層出土資料が注意される。黒褐色土で、E T 5 区の第16層と同一層である。古式土師器の壺・かめ類、碧玉、水晶の剥片を検出した。

② E T 5 区

E T 5 区は E T 4 区の北側に隣接する。4 × 2.5 メートルの大きさである。さらに東側へ拡張する予定であったが、溜めマスや排水パイプなどがあり、断念した。昨年、大量の土器群の包含層を確認しており、本年度はその全容を明らかにし、さ



写21 E地区T4区全景 (調査後、南より)



写22 E地区T5区検出遺構全景 (東より)

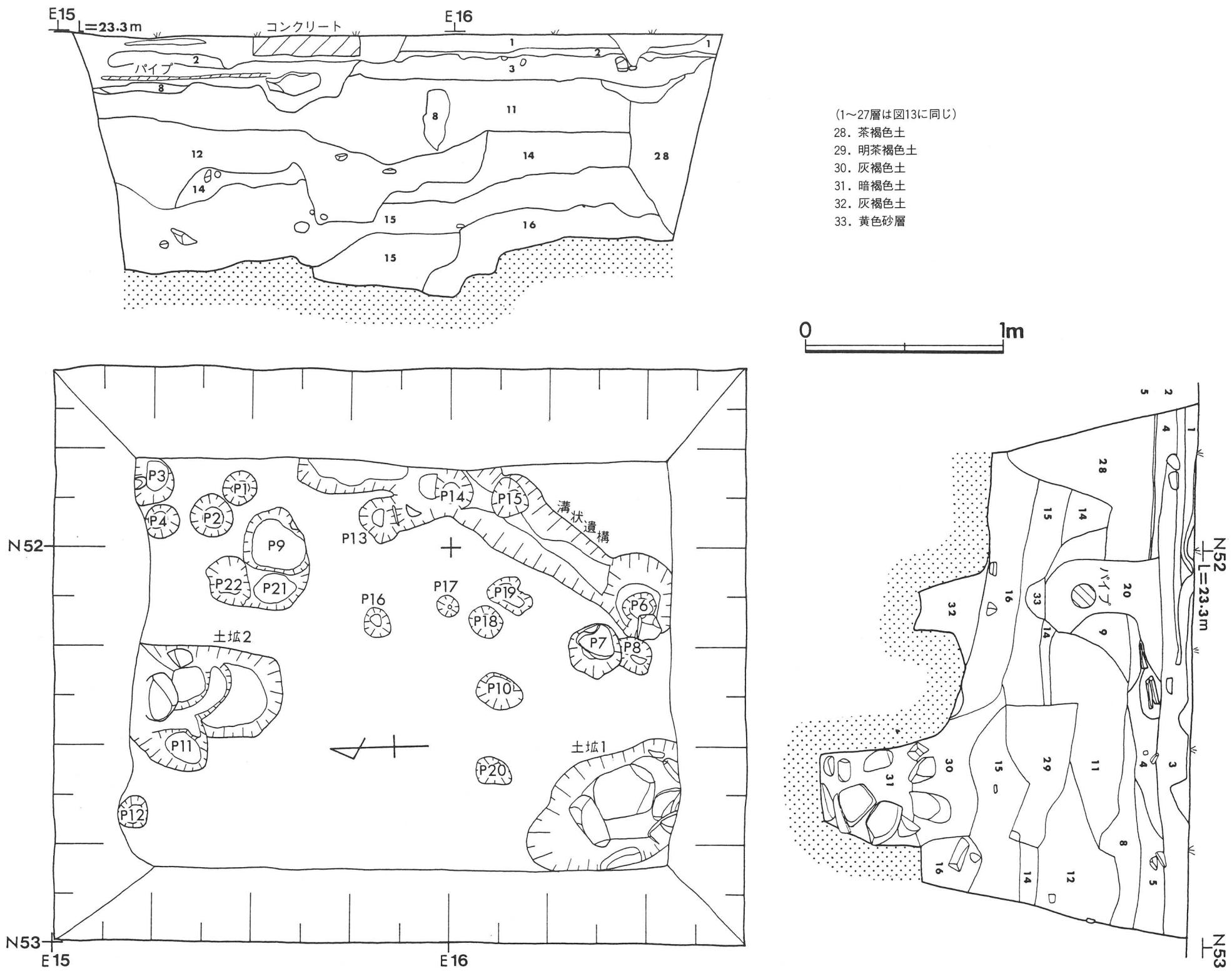


図15 E地区T5区遺構および東壁・南壁実測図

らに遺構の検出に努めた。

土層は E T 4 区での状況とほぼ同様である。14 層は黄茶色の砂層で調査区の全体に見られ、キー層として役立った。14 層の下に 15 層、16 層があり、さらに地山に続く。地山は西に緩やかに傾斜している。

遺構 遺構は地山面で検出した。しかし中には 15 層または 16 層上面から掘り込まれたものもある。

土壌は 2 基ある。土壌 1 は全体を検出していない。短径 60 センチ、深さも 60 センチを測る。断面図（図 15）を見ると 16 層上面から掘り込まれている。内部には人頭大のれきが多く、筋砥石も 1 個出土している。その他、土師器片、碧玉片も落ち込んでいた。土壌 2 もプランの全容が不明だが、短径 50 センチ、深さは 20 ~ 40 センチである。15 層上面から掘り込まれている。内部から糸切り底の土師質皿が出土した。

溝状遺構 調査区の南東隅を横切る。「く」の字状に弱く屈折する。溝の内外にピットが見られる。溝の長さは 1.8 メートル、幅 20 ~ 30 センチ、深さは 15 センチ前後と浅い。内部から土師器片、碧玉片が出土している。

ピット ピットは合計 22 個ある。小面積のため、互いの関連は不祥である。P 6 は直径 40 センチ、深さ 40 センチのしっかりしたピットで、2 段掘りにされて



写23 E 地区 T 5 区遺物出土状況（地山直上、南より）



写24 E地区T5区第16層（地山直上）遺物出土状況（右下は土塙1内）

いる。P7は直径25センチ、深さ35センチで、底面に平板な石があった。両ピットとも、土師器片や碧玉片を伴っている。

遺物 前述したように、14層から上層は後世埋め立てたものである。15層は灰褐色土層で、土師器片や碧玉片、水晶片を含むが、数が少ない。須恵器や土師器質皿なども含んでおり、各時期の資料が混在している。16層は黒褐色を呈し、やや粘質味を帯びる。地山の直上で、厚さは20～30センチである。単一時期に属する古式土師器が折り重なるように出土し、その中に玉材の破片や玉類の未成品が多数見出だされた。

土器（図16） 保存は比較的良く、調整法や文様もよく観察できる。しかし、全形のうかがえる資料はなく、壺、甕類でいえば、肩部から胴上半部までのものが大部分である。底部は今のところ検出されていない。

器種には壺、甕、器台、高杯、低脚杯がある。甕が最も多く、その他は数点までである。

壺には2種ある。6は複合口縁で、口径21.4センチを測る。甕に比べて頸部がやや長く、口縁の外反度も強い。口縁端は角張っており、口縁屈曲部は外側へ突き出している。口頸部とも内外はヨコナデされ、頸部以下内面はヘラ削りが施される。9は屈曲部から上が筒状に著しく伸びたもので、一応長頸壺としておく。胎土はこまやかで、器壁は薄く、作りも丁寧である。

甕は大きさから2種に分けられる。小型品（1～4）は口径17センチ前後。複合口縁で、口縁端は角張る。屈曲部は外側へ突出する。口頸部内外ともヨコナデ調整で、頸部以下内面はヘラ削りがなされている。体部外面はハケ目調整されている。肩部にはクシ状工具による波状文や平行沈線が施される場合があるが、無文のものが多い。

大型品は口径26.4センチを測る（5）。口縁端の処理や屈曲部が突き出す点は小型品と同様である。調整法は口頸部内外面ヨコナデ、内面頸部以下はヘラ削りの後ハケ目調整がなされている。肩部にはクシ状工具による平行沈線と連続刺突文が施されている。

器台はいわゆる鼓形器台である。7は脚部の大部分を欠く。受け部の口径24.6センチ、筒部は高さ1.8センチを測る。受け部内外面、脚部外面はヨコナデされ、脚部内面はヘラ削りがなされている。8は脚部のみである。端部の径は20センチを測る。外面と脚端部内面はヨコナデ、その他の内面はヘラ削りの後、荒くヨコナデを施す。

その他図示しなかったが、小型の甕の破片で、口縁が複合口縁にならず、単純に「く」の字状に外反する個体があり注意される。

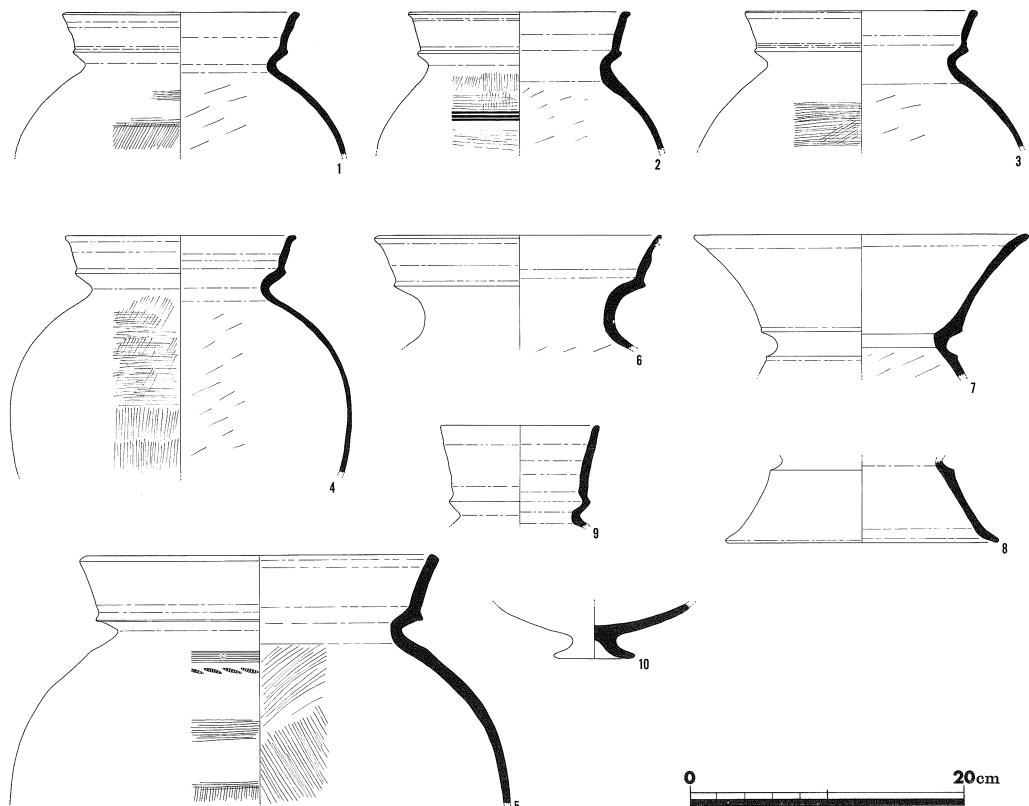
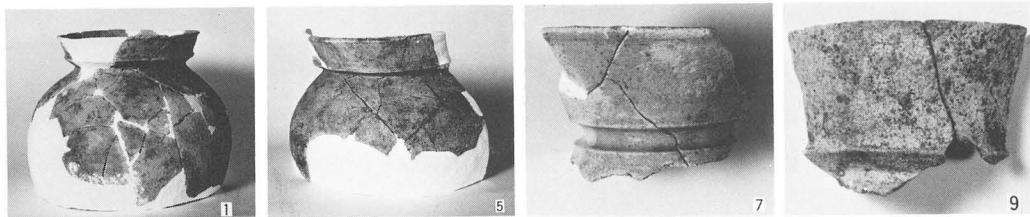


図16 E地区T5区第16層出土土器実測図



写25 E地区T5区第16層出土土器（番号は図16に同じ）

低脚杯（10）杯部の口縁部を欠く。脚端部の径は約6センチを測る。赤褐色で胎土に砂粒を多く含む。焼成は良好である。

玉類（図17）玉類は大量の土器の間に散乱した状況で出土した。玉材は碧玉と水晶が大部分を占め、他に黒曜石、石英が若干ある。細かなチップやフレイクがたいへん多く、明確な未成品は少ない。

1～4は碧玉製管玉の未成品で、いずれも側面打裂工程にある。研磨は行なわれていない。4角柱で調整の剥離がなされている。1面ないし2面には1度の打撃で剥離された平板な面が残っている。1で長さ3.5センチ、幅1.1センチ、厚さ1センチを測る。5は同じく碧玉で板状をなす。長辺の長さ4.3センチ、厚さ9ミリを測る。形割りの際の母岩の可能性もある。

6は水晶で、全体に細かな剥離痕が残る。かなり大きな材料を使い、結晶面は見当たらない。研磨はなされていない。切子玉か丸玉の未成品であろう。高さ2.8センチを測る。

砥石は2個ある。1つは内磨き砥石で、他の1個は土壌1出土の筋砥石である。内磨き砥石は結晶片岩製で、長さ10センチ、幅3.4センチ、厚さ1.4センチを測る。使用痕は一部にのみ残る。筋砥石（写27）は花こう岩質の石材で、長さ35センチ、幅14センチ、厚さ16センチを測る。一面にのみ使用痕が残り、数条の筋が走る。

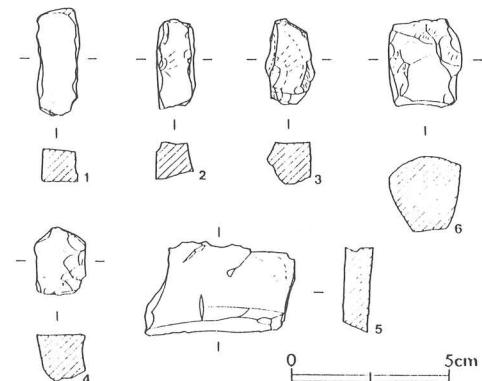
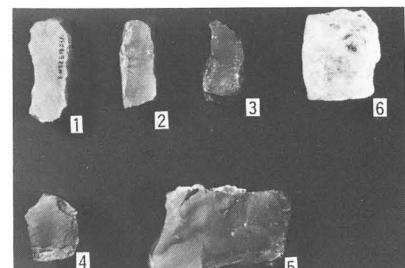


図17 E地区T5区第23層出土玉類実測図



写26 E地区T5区第16層出土玉類
(番号は図17に同じ)



写27 E地区T5区土壌1内出土砥石

(5) G 地区

G 地区は玉湯川に沿った低地であるが、F 地区に比べると、1 メートル前後高くなっている。指定地内には 2 軒の家がほぼ敷地いっぱいに建っており、わずかな空き地も築庭がなされ、調査区を設定することができなかった。そのため、G 地区の南側に隣接する畠を調査地に選んだ。

この畠は標高 23.3 メートルほどの平坦地で、20 平方メートルの広さがある。東側は 1 段高く宅地となり、西側は逆に 1 段低くなっている。玉湯川の現水面よりは約 3 メートルほど上がっている。

畠の中央に 2 × 4 メートルのトレンチを設けた。深さ約 180 センチで川に向かって傾斜する地山に達した。7 層は褐色の砂質土で、以下粘質土と砂層が地山まで続いている。遺物は陶磁器以外にはなかった。



写28 G地区T1区全景（調査前、南東より）

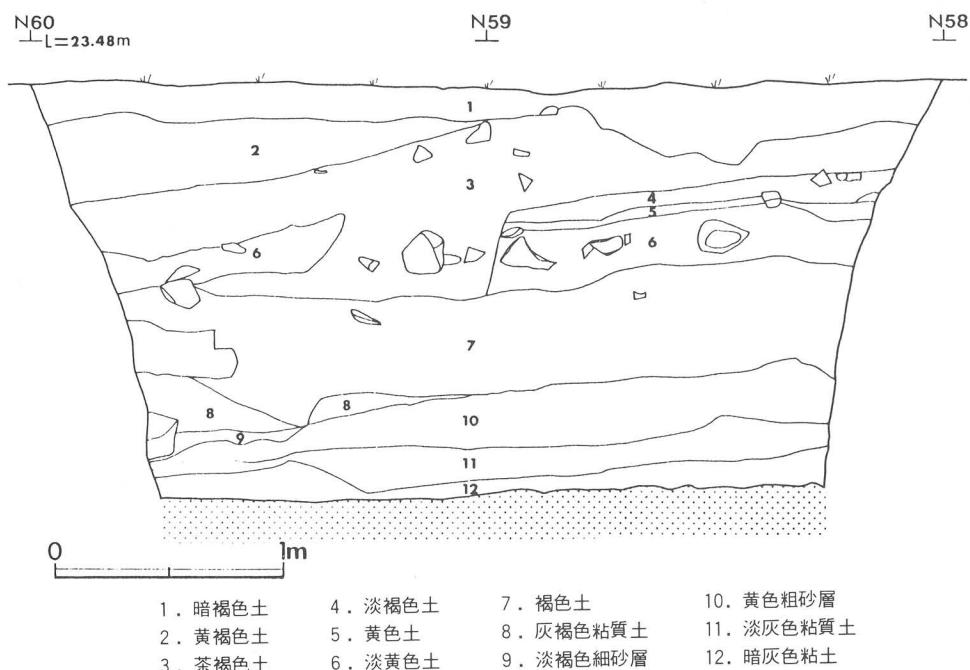


図18 G地区T1区北壁実測図

V ま と め

本年度で、58年度から2次にわたる調査を終えた。59年度はC地区とE地区でそれぞれ時期の異なる玉作り資料を検出し、昨年度と合わせ、指定地における遺物包含層と性格の概要を確かめることができ、ほぼ所期の目的を達することができた。

旧地形について 指定地の現状は、要害山から北西に派生する丘陵部と、その裾から玉湯川の間に広がる低地からなっている。このことについて、基本的な変更はないが、各所に石垣等を設けて平坦地を造成し、地形を改変している。

丘陵部は2つの谷によって3つに分けられる。本殿裏の最も高い主尾根は後世先端部が大きくカットされ、その土砂はB地区の造成のために使われている。C地区は、主尾根から北西に派生する小尾根で、相撲場から南へ入り込んだ深い谷で主尾根と区別されていた。この谷は、相撲場の造成とB地区の埋め立てで、なくなっている。

最も西側の丘陵と主尾根の間は、もとから、浅いが、やや奥の深い谷で、「湯谷」と呼ばれている。この谷は、良質の水が流れ、旅館の水源となっている。

丘陵部裾から、玉湯川の間には、さまざまの高さの石垣が築かれている。山裾の方が高く、川に近くなるほど低い。E地区、F地区的調査で明らかになったように、もとは、山裾から川に向かって、緩やかに傾斜していたと考えられる。石垣もE地区T4区での例のように、現在のようになるまでに、造り替えたこともあったようである。

C地区 遺物が大量に出土したCT4区は旧地形の谷にかかった地域にある。遺構はなく、いずれも包含された状況で出土している。出土状態から2次的な堆積と考えられ、周辺から流入したものと推定される。第4層での玉作りに関する資料の特徴は碧玉、めのう、水晶の他に、貞岩製臼玉が大量に生産されたことである。伴出土器は山陰須恵器編年の第3期で、⁽⁸⁾ほぼ6世紀後半と考えられる。

玉作湯神社境内古墳の形態は周辺のトレンチ調査でもはっきりせず、センターのみからの判断は危険だが、一応、方墳としておきたい。

E地区 E地区は玉作り遺物を含む大量の土器群が出土したことで、注目される。遺物を包含した第16層は地山の直上であり、土器の保存も良好で、2次的な堆積とは考えにくい。土器（甕）の特徴は次のとおりである。底部は発見されていないので、不明である。

①複合口縁で口縁部外面が無文、屈曲部外面の突出度が強い。

②口縁端が角張っており、ガッシリした印象を与える。

③肩部に文様を施す例もあるが、少数で、大半は無文である。

玉類では、碧玉と水晶で大部分を占め、若干の黒曜石を含む。めのうが検出されていない点注意される。

F地区第1地点4-d層とE地区T5区第16層 昨年検出した、F地区の4-d層とE地区16層は約7メートル余り離れているが、ともに地山直上に堆積する黒褐色土で、色調のみならず、土質の点でも類似している。

4-d層は厚さ5~40センチ、標高21.0~21.1メートルを測る。16層は厚さ20~30センチで、標高は地山面で21.9~22.2メートルである。図19はE地区でE17ライン、F地区でE18ラインと、2メートルほどのずれがあるが、模式的に図化したものである。これを見る限り層位的には同一層として矛盾はない。土器については、4-d層出土土器と比べると口縁端や口縁部屈曲部の処理法など、若干の相異点はあるが、同一グループに属し、藤田編年の山陰IV期の範⁽⁹⁾ちゅうに含まれると考えられる。

玉類についても碧玉と水晶を主な材料としていることや、めのうが検出されない点も共通している。

この第16層(4-d層)は、おおよそE20ラインから北、N52ラインから西、N59ラインから東の方向に広がっているものと考えられる。

総括 2次にわたる調査を行ったが、建物等で調査ができなかった地点も多く、全体を正確に把握するには至らなかった。しかし、概況は知ることができたと考える。

宮ノ上地区では、はじめ社務所西側一帯で古墳時代前期の玉作りが行なわれ、その後、1段上がったC地区で内容を異にした古墳時代後期の玉作りが実施された。この地区は、今のところ花仙山周辺玉作り遺跡群の中では最も古い玉作り遺跡であり、また保存良好の大量の古式土師器が検出され、出雲における土器編年の資料として貴重な資料を提供した点たいへん注目される。

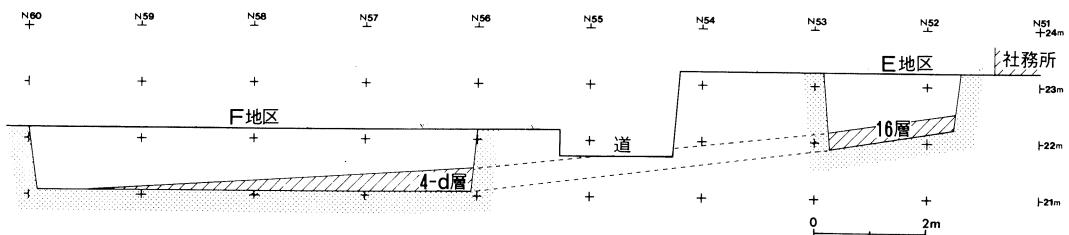


図19 F地区第1地点4-d層とE地区T5区第16層断面模式図

註

1. 玉湯町教育委員会『史跡出雲玉作跡発掘調査概報』昭和47年
2. 勝部 衛「布志名狐廻遺跡」（『島根県埋蔵文化財調査報告』第Ⅷ集）昭和56年
3. 玉湯町『玉湯町史』上巻、昭和36年
4. 註3と同じ
5. 註3と同じ
6. 玉湯町教育委員会『玉造の史跡ガイド』昭和58年
7. 玉湯町教育委員会『史跡出雲玉作跡（宮ノ上地区）第1次発掘調査概報』昭和58年
8. 山本 清「山陰の須恵器」（『山陰古墳文化の研究』）昭和46年
9. 藤田憲司「山陰『鍵尾式』土器の再検討とその併行関係」（『考古学雑誌』64－4）昭和53年。

史跡出雲玉作跡－宮ノ上地区

－第2次発掘調査概報－

昭和60年3月31日発行

編集・発行 玉湯町教育委員会

島根県八束郡玉湯町大字湯町 1793

印 刷 株式会社報光社

島根県平田市平田町 993